

# 目次

## I 『寢覚』『巢守』の古筆切

『夜の寢覚』末尾欠巻部断簡の出現

——伝後光厳院筆物語切の正本——

横井孝 5

挑発する『寢覚』『巢守』の古筆資料

——絡み合う物語——

久下裕利 29

『夜の寢覚』末尾欠巻部分と伝後光厳院筆切

大槻福子 55

『夜の寢覚』・『巢守』の古筆切をめぐる研究史

栗山元子 75

座談会 王朝物語の古筆切

……池田和臣・加藤昌嘉・久下裕利・久保木秀夫・小島孝之・横井孝(司会)

107

——五十音順——

## II 物語の古筆切

定家本源氏物語本文研究のために

——四半本古筆切の検討——

佐々木孝浩 133

伝聖護院道増筆断簡考

——新出賢木卷断簡の紹介から、道増の用字法に及ぶ——

田坂憲二 157

伝西行筆源氏集切の意義

——鎌倉時代における『源氏物語』享受の一端として——

中葉芳子 183

『源氏人々の心くらべ』『源氏物あらそひ』の祖型の断簡

——『源氏物語』評論の初期資料発掘——

池田和臣 203

狭衣物語のからみあう異文

——古筆切を横断する——

須藤 圭 219

## III 和歌の古筆切

冷泉家本と古筆切

.....

田中 登 255

『古今集』高野切の伝来と由来

.....

久保木秀夫 271

藤原通俊の続新撰について

——伝足利義尚筆後拾遺集断簡の紹介——

浅田 徹 293

古筆切と機縁と

——あとがきにかえて——

横井 孝 317

執筆者紹介

..... 321



## 古筆切と機縁と——あとがきにかえて

二〇一三年一〇月一日(金)・一二日(土)の両日、東京九段下のホテルグランドパレスで老舗の古書肆・一誠堂の創業一〇周年記念と銘打つ「古典籍善本展示即売会」が開かれた。四億六千万円の値がつけられた南宋の漢詩集『唐人絶句』が、いとも容易く売却されたと一日当日の新聞(朝日新聞夕刊)に掲載されているほど、世間の耳目を惹いたものである。

その即売会の目録には、古筆手鑑『藻塩草』をはじめとして、寛喜元年五・六月の『明月記』やら国宝『源氏物語絵巻』ツレの断簡やら冷泉家旧蔵『海人手子良集』やら、とにかく垂涎の貴重書ばかりならんでいる。そのなかで斯界のひそかな関心を惹いたのが『源氏物語』の一写本であった。「〔鎌倉後期〕写 寄合書・補配補写有」という触れ込みで、別本文の巻も含まれ研究に値する貴重な写本のひとつと見うけられはしたものの、目録に付せられた価格は「三二〇、〇〇〇、〇〇〇円——つまり三億二千万円。

もともと平安時代の古典作品で鎌倉期の写本は稀少であり、稀少であれば高価なのは昔も今も変わりがない。鎌倉期写本に「億」(あるいはそれに近い額)がついたことは前例がある。今後も同様の古写本が出現する可能性はあるだろうが、当然その価格は今回のごとき、あるいはそれ以上になることは充分予測される。しかし、これでは我々個人の研究者はとうてい手が届かない。高価な古典籍が公的機関に購入されれば、拝見する手だては全くないわけではな

いだろうが、並大抵でない時間と労力が要求されるであろうし、価格が価格だけに調査不可の場合や購入先が公表されない場合も少なくない。

そうした情勢のなかで、鎌倉期——ごく稀には平安期——の古典籍の面影を残しながら、比較的身近に研究の対象にする方法が模索されてきたのが「古筆切」であった。写本のもつ情報量は莫大ではあるが、かろうじて調査する機を得ても、それは写本の一種でしかない、という意味あいもあるのだ。鎌倉期の伝本は数が限られている。もちろん片々たる断簡の情報量は知れている。しかし、仮に同一作品で五種の鎌倉期の写本にめぐりあうためには、それこそ並大抵でない時間と労力が要求されるであろう。それにくらべれば同一作品で五種の鎌倉期の古筆切に関する情報は得やすい状況にある。現在は『古筆学大成』のような巨大なデータベースをはじめとして、さまざまな古筆資料集成が公刊されている。しかも新たな断簡の発見は続いており、その発見ごとに霧のかなたの世界についての知見が拡がり深まりつつある。

ところで、ここでわたくし事を書かせて頂ければ、当初編者として久下裕利とともに本書の構想をねっていた際、私どもの当初の予定稿は「源氏物語古筆切一斑——実践女子大学所蔵「下田記念中世古筆群」の紹介」なる題目であった。副題の意図するところの一部は本書所収の小論の冒頭に記したので参照されたいが、ありていにいえば、勤務先の資料紹介でお茶を濁そうとしていたわけである。もともとこの方面の専門家ではないし、個人のコレクションがあるわけでもない。ただ、『源氏物語』にゆかりある本務校の古典籍・古筆の収集に微力を傾けているところであり、「中世古筆」と称しても、主体は鎌倉期のものであり、稚拙な筆ながらも公開するのも学界のために意味のあることと考えてのプランであった。

ところが昨年（二〇一三）末、後光厳院筆の極めのある物語切に出くわしたのである。仁平道明氏が『夜の寝覚』末尾欠巻部のものではないかと自家蔵の断簡を紹介して以来、一連のツレとともに活発な議論を生んだ、あの「伝後光厳院筆未詳物語切」であった。しかも、『拾遺百番歌合』『風葉集』、さらに伝称筆者を一にする『夜寝覚抜書』と一致する和歌を記していたのである。おりしも本務校・実践女子大学の文系の二学部が翌年——つまり本年（二〇一四）渋谷常磐松の地に移転する計画であって、本書が上梓されているころには移転記念企画としてシンポジウム「源氏物語と古筆」とそれに併せた展覧会が開かれているはずである。その計画の矢先に、願ってもない資料が出現したことになる。と同時に、本書の諸家のすぐれた論考群にいささかなりとも花を添えることになるだろうと考え、二重三重に意味のあるものとしてその断簡に飛びついたのである。

田中登氏の『失われた書を求めて——私の古筆収集物語』（青簡舎、二〇一〇年四月刊）には同氏の選りすぐりの古筆資料との幸福な出会いが楽しげに描かれている。「その切を押し頂くようにして、書画商宅を後にした」（竹取）、「京都の某古書店の店頭に見出し」「その宝物を手にするや一目散に帰宅した」（如意宝集）、時間つぶしに入った店の手鑑に「私の目に飛び込んできた何かの絵巻の詞書」それが国宝『寝覚物語絵巻』のツレの断簡であった……などなど、偶合としかいいようのない出会いを面白おかしく叙しているのだが、もちろんそれは氏の眼力あったことだろう。ただいづれにせよ、古筆切との接触は、田中氏にせよ誰にせよ、ある機縁に結ばれてのものとかいいようがないのではあるまいか。稿者は四〇年ほど前、『夜の寝覚』についての小さな論を書いて、王朝物語の研究らしきものをはじめた。いまこうして今回の伝後光厳院筆断簡に出会って、機縁という感慨を抱かざるをえない。感傷にすぎるであろうか。

ともあれ、一連の切に対して先見の明ある研究者が『寝覚』の欠巻部ではないかと指摘し、しかし確証がないという意見には「それでも地球は回っている」と呟かざるをえなかった。その議論を、たった一枚の断簡が散佚資料と合

致することによって沈静させてしまふ、というのが古筆切研究の醍醐味であり、実証の怖さというものではないだろうか。それもこれも、ひとつの機縁というものによって、なのである。

本書は、古筆切研究の最前線をそれぞれ専門の諸家に論じていただくかたわら、冒頭の緒言にしめしたとおり『寢覚』『巢守』の古筆切に関する小特集を組んだ。これも王朝物語の古筆切研究の最前線である。特に新出の伝後光厳院筆断簡については右に経緯を説明したとおり。それぞれ読み応えがあつて、清新でありながら重厚な論が勢揃いしたと自負したい。本書が、それぞれの研究を飛躍させる発条となることを切に願うものである。「知の挑発」と冠称するゆえんであり、かつまた我々は、『源氏物語』に、平安後期物語に、日記文学に、それぞれ「挑発」をつづけてゆく所存である。

二〇一四年 四月

横 井 孝